社会派ミステリーの誕生

松本清張『点と線』も愛読書のひとつだ。写真は朝日新聞 11 月 9 日朝刊「あのとき それから」。東京駅の 13 番線ホームに立つ松本清張さん。

東京駅 13 番線のホームから 15 番線の夜行特急列車に乗り込む男女の姿を目撃させる有名な「空白の 4 分間」のトリック。1957 年に「点と線」が雑誌『旅』に掲載された。

松本清張の真骨頂は「社会性が加わった犯罪動機にある」と文芸評論家の権田萬治は指摘する。汚職隠しと組織防衛の殺人だった「点と線」の背景に、その 3 年前の「造船疑獄」などの汚職事件がある。天才的な名探偵が怪奇事件を謎解きする、江戸川乱歩や横溝正史による戦前からの「探偵小説」と異なり、刑事や新聞記者らが事件を調べる。「戦前は言論の自由がなく、探偵小説は体制批判につながる社会性をもつことが出来なかった」

動機を重んじ追求することを、清張は「性格を描くことであり、人間を描くことに通じるのではないか」と記す。「点と線」に影響されたという水上勉も「本格派のトリック小説に比して、人間描写もすぐれている（中略）単なる殺人も、その背後に社会性と人道主義的な動機をひそませれば（中略）ちゃんとした『小説』になると思った」と述べている。

「点と線」の単行本はベストセラーになり、社会派ミステリー（社会派推理小説）ブームが起きた。水上勉、森村誠一らも加わり、読者の裾野を広げた。清張は、手形詐欺に右翼がからむ「眼の壁」、終戦直後の傷痕を引きずる「ゼロの焦点」、ハンセン病差別に起因する「砂の器」、政治献金を扱った「迷走地図」と続々、発表。水上の「霧と影」「海の牙」「飢餓海峡」、笹沢左保の「人喰い」「他殺岬」「仮面の月光」、森村の「腐蝕の構造」「人間の証明」など、社会派ミステリーの名作が次々に生まれた。

その系譜には東野圭吾、宮部みゆき、高村薫らが続いていると権田は言う。「だが今、個人情報保護法などによって権力や社会、差別などの問題が見えにくくなり、特定秘密保護法で壁は高くなった。代わりにトリックや謎解きに魅力を感じる若い作家が増えている」。ネット社会やペーパーカンパニーの租税回避問題など、「自らが置かれた社会の文脈を掘り下げ、巨大な問題を追及する作品を書いてほしい」と訴える。

（2016 年 11 月 13 日）